

モーツァルト室内管弦楽団 第193 回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester Japan / 193.Regulärkonzert

〈ファイナルコンサート〉 ～モーツァルト名曲集～

2020年3月28日(土) 午後2時30分●いずみホール

Samstag, 28. März, 2020, 14:30 Uhr●Izumi Hall Osaka

- 主催：NPO法人モーツァルト室内管弦楽団 <http://moz-kam.org>
- 協賛：いずみホール〔一般財団法人 住友生命福祉文化財団〕
- マネジメント：大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504

*ロビーでは大阪ユニセフ協会を通じて、世界の子どもたちのための募金活動を行っています。



モーツァルト室内管弦楽団 第193回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester Japan / 193. Regulärkonzert

2020年3月28日(土)午後2時30分 ●いずみホール

Samstag, 28. März, 2020, 14:30 Uhr ●Izumi Hall Osaka

〈ファイナルコンサート〉 ～モーツァルト名曲集～

◆モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791)

フルート協奏曲 第2番 ニ長調 K.314

Konzert Nr.2 D-dur für Flöte und Orchester KV314

I. Allegro aperto

II. Adagio ma non troppo

III. Rondeau; Allegro

ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K.219 《トルコ風》

Konzert Nr.5 A-dur für Violine und Orchester KV219 „Türkische“

I. Allegro aperto - Adagio - Allegro aperto

II. Adagio

III. Tempo di Menuetto - Allegro - Tempo di Menuetto

* * *

ピアノ協奏曲 第9番 変ホ長調 K.271 《ジュノム》*

Konzert Nr.9 Es-dur für Klavier und Orchester KV271 „Jeunehomme“**

I. Allegro

II. Andantino

III. Presto - Menuetto; Cantabile - Tempo primo

ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488**

Konzert Nr.23 A-dur für Klavier und Orchester KV488**

I. Allegro

II. Adagio

III. Allegro assai

* * *

交響曲 第40番 ㄱ短調 K.550

Sinfonie Nr.40 g-moll KV550

I. Molto Allegro

II. Andante

III. Menuetto; Allegretto

IV. Allegro assai

フルート: 青山 優子 / Flöte: Yuko Aoyama

ヴァイオリン: 八幡 順 / Violine: Jun Yahata

ピアノ: 木下 千代*、池田 洋子** / Klaviere: Chiyo Kinoshita*, Yoko Ikeda**

管弦楽: モーツァルト室内管弦楽団 / Orchester: Mozart-Kammerorchester Japan

コンサートマスター: 釋 伸司 / Konzertmeister: Shinji Shaku

指揮: 門 良一 / Dirigent: Ryoichi Kado

あゝ、40番！

■交響曲 第40番 ト短調 K.550

モーツァルトの交響曲第40番は誰もが認める名曲である。アイネ・クライネ・ナハトムジークを除けば彼の作品の中では最も有名なものであろう。私がこの曲に出会ったのは中学生のころであろうか。演奏は難しそうだと思ったが強い憧れの対象となった。私の通っていた高校にはクラブとして珍しくオーケストラ部があった。ヴァイオリンが2, 3人しかいないオーケストラとは名ばかりの貧弱なアンサンブルだったが、いざ本番となるとOB、OGが大勢参加するので立派なオーケストラになるのである。私が3年の時この憧れの名曲に挑戦した(1楽章と3楽章だけだったが)。他校の名手にも応援を頼んだ(この中には「モーツァルト心の軌跡」で一躍有名になった畏友井上和雄君がいた)。

この曲は始め方が独特である。弦楽器のみで始まりモーツァルトが多用したヴィオラのディヴィジ(divisi:一つのパートを分けてそれぞれ異なる音を弾かせるやり方)が奏でる和音に乗ってあの有名な哀感あふれるメロディが流れる。初めの13小節間には管楽器は一切登場しない。こんな始め方をする交響曲はハイデンやベートーヴェンには全くない。このような室内乐的な始め方はあのメロディに全くふさわしいし、この交響曲の性格を決定づけている。

この交響曲の一番の聴きどころは第4楽章の展開部であろう。展開部にはモーツァルトの狂気が満ちあふれている。展開部の最初の部分を当時の聴衆はどのように聴いたのだろうか。この部分は現代のわれわれが「現代音楽」を聴くような感じに聴こえたのではあるまいか。続く部分は延々と転調が続き、元のト短調からは極めて遠い嬰ハ短調にまで行っている。そしていつの間にか元のト短調に戻っているのである。このようななりゆきは漫然と聴いているとただのきれいな音楽にしか聴こえない。このように普通に聴いているときれいな音楽に聴こえるが耳のある人が聴くと恐ろしいことが行われているのがわかる、というのはモーツァルトの作曲の魔術であろう。『あちこちに音楽通だけが満足を覚える場所もありながら、それでいて、通でない人も、なぜか知らないながらもきっと満足するようなものです。』(1782年12月28日、ウィーンよりザルツブルクの父親宛のモーツァルトの手紙より、自作のピアノ協奏曲に関して。「モーツァルトの手紙」柴田治三郎編訳、岩波文庫、1980年より)。楽団が活動停止に至る最後の演奏会をこの曲で締めくくることができるのは大変幸せに思う次第である、

■フルート協奏曲 第2番 二長調 K.314

1778年(モーツァルト22歳)に、オランダ人の音楽愛好家ドジャンのために作曲されたフルート協奏曲第1番K.313、

フルートのためのアンダンテK.315と合わせて3曲のうちの1曲。ところが、この曲より長2度低いハ長調で、音楽がほとんど同じのオーボエ協奏曲が20世紀になって発見され、研究の結果オーボエ協奏曲が原曲とされたため、管楽器のために作曲された最も有名とされるこの協奏曲が何と編曲であったことになってしまっている。しかし、本質的に二長調の楽器であるフルートの特性を生かし切った名曲であるので現在はフルート協奏曲としての人気の方がはるかに高い。

■ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K.219《トルコ風》

この協奏曲に先立つ第2～4番とともに1775年(モーツァルト19歳)に作曲されている。第1～5番の5曲の中では最も長大で、第3楽章にはトルコ行進曲のリズムを持つ中間部があるので《トルコ風》の異名を持っている。第1楽章の始め方も一風変わっている。オーケストラだけで提示部の主題で始まるが、いったん終止するとテンポがアダージョとなり独奏ヴァイオリンがしずしずと現れ、優雅な旋律を奏でる。一転して最初に戻るが独奏ヴァイオリンはオーケストラの主題に重ねて全く違う第1主題を弾くのである。第1, 3楽章はこのように構造を持っているのだが第2楽章もそれらに劣らず長い。全体としてモーツァルトの最後のヴァイオリン協奏曲にふさわしい大きさを持っている。

■ピアノ協奏曲 第9番 変ホ長調 K.271《ジュノム》

この協奏曲は1777年(モーツァルト21歳)にザルツブルクを訪れた「ジュノム」という謎の女性のために書かれた。この曲は後期のピアノ協奏曲に匹敵する奇跡的な大傑作である。後期の協奏曲にも見られない新奇な形式が少なからずあるのだ。まず第1楽章の開始部である。何とオーケストラとピアノとが交互に演奏するのである。こんな形が再び現れるのはずっと後の時代のベートーヴェンの《皇帝》まで待たなければならない。続いてオーケストラがひとしきり主題を奏した後のピアノの登場の仕方も新しい。この協奏曲の構成上、最も大きいものは第3楽章に長大なメヌエットの中間部があることであろう。この形式は後の第22番K.482(同じ変ホ長調)で再び使われている。

■ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488

誰知らぬもののないモーツァルトのピアノ協奏曲の最高傑作。すべてにバランスの取れた名曲である。特に第2楽章の美しさは格別で、短調好きのモーツァルト・ファンにはたまらない。モーツァルト室内管弦楽団との協演が10回を越える名手、池田洋子さんの名演が期待される。

門 良一 ● 指揮 *Ryoichi Kado, Dirigent*

1939年大阪生まれ。1962年京都大学理学部物理学科卒業、67年同大学院修了。京都大学オーケストラには学部、大学院を通じて10年間在籍し、フルート奏者、指揮者を務め、同オーケストラの発展に多大な貢献をする。また、客演指揮者の故近衛秀麿、故朝比奈隆、故岩城宏之、故若杉 弘、故奥田道昭、秋山和慶各氏等のもとで副指揮者を務め、薫陶を受ける。70年モーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり、同楽団を日本有数のプロ室内オーケストラに育て上げた。モーツァルト、ハイドン等の古典派の作品を35人の室内オーケストラで優雅に繊細に演奏する独自のスタイルを確立している。企画力にも優れ、モーツァルトの「予約演奏会の再現」やオペラ《イドメネオ》の世界初ノーカット上演などの大きな企画を成功させている。また、世界的名手との協演も多く、ピアノのマリア=ジョアオ・ピリス、シプリアン・カツリス、ヴァイオリンのライナー・キュッヒル、ホルンのペーター・ダム等との協演においてはソリストの絶大な信頼を得て大成功を収めている。近年は古典派だけでなく前期ロマン派やフランス音楽においても、企画、演奏両面で注目すべき成果を上げている。アマチュアの指導にも熱意を持ち、京都産業大学神山交響楽団の音楽監督・常任指揮者を創立時より昨年まで務めている。モーツァルト研究者として知られ、1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにおいて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。



モーツァルト室内管弦楽団 ● 管弦楽 *Mozart-Kammerorchester Japan*

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、50年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に17回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス(85、87年)、シプリアン・カツリス(93、94年)、ペーター・ダム(83、86、88、98、00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル(86年)、ライナー・キュッヒル(90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シティオペラの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。「素晴らしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。07～09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09～11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を開催。また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を、19年からは〈創立50周年シリーズ〉を開始している。2017年1月にNPO法人となる。

●メンバー	コンサートマスター	釋 伸司				
第1ヴァイオリン	釋 伸司	本多 智子	稲庭真理子	松本 紗希	谷口 朋子	
	北村 奈美					
第2ヴァイオリン	中川 敦史	黒江 郁子	徳田 雅子	福岡 昂大	幣 晴代	
	清水めぐみ					
ヴィオラ	道幸 明美	上野 亮子	三上 哲	白木原有子		
チェロ	山岸 孝教	三宅 香織	境 綾子	石塚 俊		
コントラバス	土屋 綾子	波田野瑞歩				
フルート	大江 浩志	毛利 恵美				
オーボエ	中江 暁子	大森 美希				
クラリネット	高橋 博	門 小夜子				
ファゴット	佐伯 利之	倉永 晴美				
ホルン	佐藤 明美	垣本奈緒子				
インスペクター	中川 敦史					
ライブラリアン	本多 智子					



青山 優子●フルート *Yuko Aoyama, Flute*

大阪芸術大学演奏学科卒業。1999、2002年大阪、2014年東京にてリサイタル開催。2008年大阪センチュリー交響楽団とニールセンのフルート協奏曲を協演。L.モイーズ、M.デュフォーのマスタークラスを受講。「シリンクスフルートアンサンブル」のメンバーとして大阪いずみホールでの定期演奏会や東京公演等で活躍する他、CD「リカル・ランドスケープ」「展覧会の絵」をリリース、好評を博す。奈良多文化共生音楽祭参加等、多方面にわたり活動を展開している。持田洋氏に師事。



八幡 順●ヴァイオリン *Jun Yahata, Violin*

大阪音楽大学卒業。長谷川孝一、阿部 靖の各氏に師事。日本学生音楽コンクール入賞。81年「八幡順ヴァイオリンの世界」を開催以後、各地で活動を展開。中でも小林道夫氏のピアノ伴奏によるリサイタルで好評を博す。また、モーツァルト室内管弦楽団等と協演を重ねる他、「サマーミュージックフェスティバル大阪」に度々出演。また、ニューヨークミッドナイトミニコンサート、「六本木ヴァイオリン・ナイト」を企画・出演。近年はいずみホールやザ・フェニックスホールにて「クリスマスコンサート」を開催する他、モーツァルトのヴァイオリンソナタ全曲演奏にも取り組んでいる。2019年9月小林道夫氏による公開レッスンを企画し、多彩な構成で好評を得、11月にはザ・フェニックスホールにて同氏との「モーツァルト・スペシャル・ナイト」を開催。飽くなき探求心を持って愛器ガールネリ・デル・ジェスを駆使し、聴衆を魅了し続けている。日本演奏連盟、NPO法人関西音楽人クラブ各会員。



木下千代●ピアノ *Chiyo Kinoshita, Piano*

5歳よりピアノを始める。金澤孝次郎・見早子、下村和子の各氏に師事。第1回なにわ芸術祭ジュニア音楽コンクールジュニア音楽賞受賞。東京藝術大学卒業、同大学院修了。在学中より井口秋子、高良芳枝の各氏に師事。ワルシャワ音楽院、ザルツブルグモーツァルトウム等のマスタークラスで研鑽を積む。リディア・コズベック、ピヒト=アクセンフェルト、ジェルメース・ムニエの各氏に師事。日仏コンクールフランス総領事賞受賞。日演連推薦演奏会に出演。リサイタルをはじめ、関西主要オーケストラとの協演や国内外の著名アーティストとの室内楽や伴奏など幅広く活躍。1998年ラヴェル・ピアノ曲全曲演奏会を開催。現在、兵庫教育大学大学院教授。大阪教育大学、武庫川女子大学各講師。日本ピアノ教育連盟関西支部運営委員。日本ショパン協会関西理事。公益社団法人日本演奏連盟、日本音楽表現学会、NPO法人関西音楽人クラブ各会員。



池田洋子●ピアノ *Yoko Ikeda, Piano*

東くめ・照子・貞一、井口愛子の各氏に師事。第7回全日本学生音楽コンクール高校の部第1位、文部大臣賞受賞。1954年毎日音楽コンクール入選。東京藝術大学在学中に渡仏、パリ・エコール・ノルマル音楽院にてジュル・ジャンティ、アルフレッド・コルトー両氏に師事。日本人として最初に演奏家資格を得て卒業。マリア・カナルス国際コンクール第2位(1位空席)、ヴィオッティコンクール金賞を受賞し、ピアニストとして華やかなスタートを切る。数多くのオーケストラとの協演、リサイタル、ピアノデュオ、室内楽の分野にも目覚しい活躍を続けている。1999年川西市民文化賞、2000年兵庫県生活振興功労賞、2005年兵庫県文化賞、2015年瑞宝中綬章。神戸女学院大学名誉教授。日本ピアノ教育連盟関西支部顧問。日本ショパン協会関西支部、川西市文化スポーツ振興財団各理事。川西市民合唱団団長。川西音楽家協会会長。NPO法人関西音楽人クラブ会員。

モーツァルト室内管弦楽団は1970年に創立された。私は京大オーケストラに学部・大学院を通じて足かけ10年在籍し、大学院を退学して就職したのちも音楽への愛好心を押しえられずにいた。当時考えたことは、アマチュア奏者の中にはプロをもしのぐ名手が少なからずいるということ、それらの名手たちとプロ奏者の有志が組めば最高のアンサンブルができるのではないかとしたことであった。その当時はイムジチやシュトゥットガルト室内オーケストラの影響で弦楽合奏のいわゆるバロックオーケストラが圧倒的に多かったが、私は管楽器の入った「室内管弦楽」にこだわった。弦楽器だけだと響きがシリアスになりすぎるし、管楽器が一本でも入ると色が変わって多彩になる。これは私自身が管楽器奏者（フルート）だからであろうか。演目は最初からモーツァルトに決めていた。モーツァルトは純粋な響きを要求するのでアマチュアには無理で、上述のようなプロ・アマ混合の優秀な団体でなければならない。そこで京大オケの後輩たちに声をかけ、顔見知りの京都市交響楽団のメンバーにも呼び掛けた。このような働きかけをする少し前だったと思うのだが、たまたまNHK-FMで耳にしたのがモーツァルトの《ポストホルン・セレナーデ》であった。演奏はバリリ弦楽四重奏団とウィーン・フィルの管打楽器グループであった。この演奏はバリリ弦楽四重奏団がオーケストラの弦楽パートを1人ずつで受け持ち（コントラバスは新たに加わったようだが）、管打楽器は楽譜通りという、通常の演奏会では考えられない、録音によってのみ初めて成り立つ形式であった。これが実にすばらしい演奏で、新しい室内管弦楽団ができればこの曲をまずやらなければならないと心に決めた。

さて、このようにしてできたモーツァルト室内管弦楽団の最初の演奏会は、1970年11月30日に京都府立文化芸術会館で行われた。曲目はもちろんオール・モーツァルトで、《セレナータ・ノットゥルナ》K.239、パリ音楽院出のヴァイオリンニスト、高木まり子さんをソリストに迎えてヴァイオリン協奏曲第3番K.216、そして念願の《ポストホルン・セレナーデ》よりフルートとオーボエの活躍する第3・4楽章、最後は交響曲第29番K.201であった。このプログラムで注目されるのはセレナーデが2曲もあることであろう。私の考えではモーツァルトは、はじめは交響曲よりもセレナーデを重視していて傑作もセレナーデの方に多い。私は演奏会には楽しいものであるべきと思っていたので、娯楽音楽であるセレナーデを入れたかったのである。

新しいオーケストラを維持していくのは大変であった。まず練習場がない。自治体の作ったホールが沢山ある現在とは事情がちがう。あちこちを借り歩いた。混成メンバーなのでスケジュールの調整も大変であった。プロ奏者にはギヤラを支払わなければならないので経済的にも苦しかった。

一方で当時、出演するソリストが演奏会の経費を負担する「協奏曲演奏会」が盛んになりつつあった。われわれ新興のオーケストラにこの種の演奏会のお声が多かかり、月に2回も開催されることもあった。こういう風になるとアマチュア・メンバーは参加しにくくなるのでどんどん脱落していった。その結果、モーツァルト室内管弦楽団はプロ・オーケストラとなっていたのである。「協奏曲演奏会」が増えるのと前後して京都より大阪での演奏会が増加していった。1980年を過ぎたころからである。演奏会のマネージメントもそのころ大阪アーティスト協会を立ち上げた黒川浩明氏のお世話になり、それは今日のこの演奏会まで続いている。

初の外来ソリストとなったのはカールハインツ・ツェラーである。1973年の2月6日であった。ベルリン・フィル首席フルート奏者を辞して間もない頃であったと思う。当時オケのレベルは決して高くはなかったと思うが、ツェラーは誠実に繰り返し練習に付き合ってくれた。この演奏会は当時の京都会館第2ホールで行われたが、座席数を上回るチケットが売れたため多数の立ち見客が出る大ヒットの演奏会となった。その後多くの外来ソリストと協演したが最も印象に残るのはピアノのマリア・ジョアン・ピリス(1985、87年)であろう。モーツァルト弾きとして知られ、その音色は独特のものであった。初協演の時であったと思うが、「お前は大学で物理を教えているらしいが本当か？実は私も小さい時理科や数学が得意だった。」とのたまわれたのである。大変気さくな人柄で一緒に飲みに行ったこともあった。日本が好きで「日本の旅館に泊まる背中がまっすぐになる」と言っていた。ピアノのシブリアン・カツァリス(93、94年)も面白い人だった。稀代の練習魔で本番前日の合わせの後、「この練習場まだ使える？」と聞き、時間いっぱい練習したという。本番の後に、楽屋のアップライト・ピアノで練習したという話も聞いた。最も回数が多かったのはホルンのペーター・ダム(83、86、88、98、00年)である。この人とはモーツァルトの未完成作品をも含めたホルン協奏曲全曲を演奏した。中でもユニークだったのは、モーツァルトが未完成で残し余白に初演者のロイトゲーブの悪口をたくさん書いている曲を、落語家桂小米朝(現・桂米團治)さんにモーツァルト役で出演してもらって演奏したことである。こういった外来のソリストと協演するとき彼らが必ずといっていいほど口にするのは「これはお前のオーケストラか？」であった。経済的にも音楽的にもお前が支配しているのか、という意味合いであろう。指揮者とオーケストラの力関係の日本と外国(ヨーロッパ)における違いを感じさせる問いであった。

東ドイツ演奏旅行を行ったのは1988年で東西ドイツ統合の1年前だった。当時の東ドイツはまさに秘境で、西ベルリンから東ベルリンに入るときは別世界に行くという思いだった。10都市で公演を行いベルリン、ドレスデン、ライプツィヒ

のほか田舎都市もあったが、すべて聴衆の入りはよくその反応も良かった。東西統合の予感など全く感じられなかった。通貨の闇レートがあったのでメンバーたちはそれを利用して楽譜を買いあさっていた。都市間の移動、楽器の運搬等すべて手抜きなく万全であった。楽団としては初の海外旅行で大変だったが、国内で予想以上の寄付が集まり、成功だったと言える。

1990年、創立20周年を機に後援会が発足した。今までチケットのお買い上げ等でお世話になっていた住友系のある企業が広く関西経済界に呼び掛けてくださったのである。60社を越える企業が法人会員になってくださり、個人会員も200人に及び、経済問題は一挙に解消した。後援会の存在は大きくその後30年の活動が続けることができたのもそのおかげである。後援会の発足と前後していずみホールの建設が行われた。世界に誇れるすばらしいホールで、今でもモーツァルト室内管弦楽団に最もふさわしいホールと言われている。

1991年、私が親しくしていたバリトン歌手で合唱指導者の益子務さんをお願いして専属の合唱団を作ってもらった。ちょうどその年はモーツァルトの没後200年のモーツァルト・イヤーだったので、団体名を「モーツァルト記念合唱団」とし、モーツァルトの《レクイエム》を協演した。以後今年の1月までミサ曲やオペラで約40回の協演をしている。

1990年ころまでモーツァルトの主として器楽曲を演奏してきたが、モーツァルトといえばオペラを外すわけにはいかない。そこで益子さんの仲介のもと堺市民オペラの協力を得て〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始した。演奏会形式でオペラの全曲をやるというのである。このシリーズの中では何とんでも《イドメネオ》K.366の世界初オリジナル・ノーカット上演（モーツァルト生誕250年の2006年1月）が輝いている。全3幕のオペラだが、特にその第3幕が長く（モーツァルト自身も台本の削減を作者に何度も打診している）、ノーカットで行くと4時間近くかかってしまう。そのためCDでもノーカットの演奏はなく（カットされた部分を別録音で付けているCDはある）、ましてや演奏会本番でノーカットで行う団体など聞いたことがない。われわれはこれをやったのである（この様子は「音楽現代」誌に書いた。モーツァルト室内管弦楽団のホームページ<http://moz-kam.org>で閲覧できる。）結果は名演奏として新聞紙上でも絶賛された（この記事もホームページで見ることができる）。〈オペラシリーズ〉の最終回は2016・18・20年の《魔笛》の連続上演で、これは初の試みとして歌手が暗譜で歌い台本に従ったしぐさをする、という形式で行ったところこれが大好評だったことはご存じの方も多いであろう。

モーツァルトは何とんでもピアノ協奏曲がすばらしい。

全23曲（最後のピアノ協奏曲は第27番という番号が付いているが、第1～4番は他人の作品を編曲したものである）の通し演奏は3回くらいやった。交響曲の全曲演奏というのもやった。モーツァルトの若い頃の交響曲は他人の作品が混じり込んでいたり、父親の作か本人の作か判然としないものがあったりして複雑なのだが、われわれは一旦モーツァルトの作とされたものについては疑わしくもすべて演奏することとした。シリーズ開始後に交響曲の新発見が2回もあり、全74曲となったのである。これは今やれと言われてもとてできない。昔は先に述べたように「協奏曲演奏会」が多くその前座として1曲ずつ演奏できたのである。「モーツァルトが終わったら次はハイドンの104曲を」という人もいたが、それは一生かかってもできないと断った。

レパートリーはモーツァルトに限ったわけではない。モーツァルトが敬愛してやまなかったハイドンの作品もやるべきと思ひ、創立の翌年には交響曲第88番をやっている。その後もハイドンはしばしば取り上げたが客の入りの悪いのが難点であった。ベートーヴェンはある意味モーツァルトとは真逆の作曲家であるが、古典派の後継者であるからもちろん取り上げ、〈ベートーヴェン・シリーズ〉として《第九》を含む全交響曲を演奏した。前期ロマン派のメンデルスゾーンやシューマンも取り上げ、それぞれの生誕記念演奏会も開催した、フランスの作曲家の作品は形式がすっきりしたものが多く、ドイツ・ロマン派のように肥大化していないので、モーツァルトの作品と共通しているところが多い。われわれの行った（フランス音楽特集）はユニークなものではなかったらうか。

オーケストラ奏者の実力はこの二、三十年で飛躍的に向上したと思う。西洋音楽の到来以来150年、教育の成果もあるろうが、西洋音楽演奏のノウハウを日本人演奏家が着実に理解している現れではないだろうか。

楽団創立後50年、すべてをやりつくしたように言う人もいようが、私としてはまだ道半ばの感が強い。モーツァルトの作品でやっていない作品も多いのだ。特にセレナーデの初期のもの、これは楽団創立の主旨でもあったのでやりたかった。それに初期のオペラにも手が付いていない。天満教会で続けていたヘンデルのオルガン協奏曲全曲シリーズが中断するのも残念であるが、これは何とかして完了させたいと思っている。

楽団創立50周年、常任指揮者の私も80歳、こういう区切りの良い時（？）に活動を終えるというのも運命であろう。室内楽の演奏会だけは大阪アーティスト協会の協力を得てこれからも何とか続けていく予定である。

いろいろな方に大変お世話になりました。深く深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

会 長 谷 口 安 平 (京都大学名誉教授)
 監 事 玉 井 英 二 (三井住友カード特別顧問)
 顧 問 伊 藤 郁 太 郎 (大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長)

《法人会員》(50音順)

荒川化学工業	日 本 製 鉄	中 西 金 属 工 業	三 井 住 友 カ ー ド
関 西 電 力	住 友 生 命 保 険	羽 車	三 井 住 友 銀 行
小 林 製 薬	住 友 倉 庫	林 六	
阪 野 商 店	ダ イ キ ン 工 業	福 山 製 紙	
サントリーホールディングス	高 松 建 設	マ キ 工 業	

《個人会員》(入会順・敬称略)

深 田 晴 世	金 定 秀 光	佐 竹 時 子	井 狩 啓 子	久 木 山 信 光
福 岡 隆 子	金 定 嘉 也 子	宮 崎 悦 朗	原 田 隆 宏	中 西 彰
梅 原 一 哲	日 高 穂	野 口 外 志 子	東 里 香	中 西 規 律 委 子
石 本 三 千 也	馬 場 明 和	小 山 浩	曾 我 見 郁 夫	濱 崎 寛
岸 田 克 己	阪 野 和 子	野 原 清 秀	筑 瀬 重 喜	上 田 成 之 助
梅 村 博 也	和 田 暁 夫	松 井 基 純	苧 阪 満 里 子	奥 野 哲 久
屋 良 卍 佐 治	桑 名 孝 子	松 井 香 代 子	笠 松 規 子	野 村 正 朗
國 友 正 和	石 光 正 男	大 磯 隆 一	近 藤 康 博	田 中 道 子
稲 垣 千 代 子	川 島 啓 助	橋 本 博	松 江 忠 二	釜 江 常 好
浮 田 俊 太 郎	豊 田 成 子	松 谷 郁 子	宇 民 正	早 山 雅 子
桑 山 弘	切 畑 敦 詞	山 下 鉄 男	高 松 孝 之	久 木 山 より 子
三 谷 郁 子	三 石 武 男	萬 野 尊 昭	後 藤 喬 雄	秦 幸 次
三 浦 信 一 郎	神 林 恒 道	松 田 富 久 子	青 山 由 子	松 野 雅 典
水 島 敬 夫	杉 浦 和 子	榎 原 良 行	文 野 彰 藏	田 原 孝 子
渡 辺 優 子	野 村 透	渡 辺 義 明	土 橋 康 男	山 之 口 玲 子
安 藤 邦 洋	玉 手 隆 子	能 田 久 美	土 橋 瑞 枝	小 谷 公 穂
阿 部 由 美 子	有 賀 熙 雄	宮 北 浩 司	笠 松 義 男	圓 正 鑑
村 本 孝 夫	佐 野 哲 郎	市 崎 英 二	米 坂 享	作 美 代 子
松 本 幸 道	小 柳 陽 一	櫛 木 好 明	太 田 真 知 子	内 海 壽 美
笹 川 忠 士	田 中 四 郎	門 謙 二 郎	和 田 み つ 子	靱 山 綾 子
緒 林 桂 子	島 村 猛	森 原 隆 繁	栢 眞 紀 夫	佐 藤 伸 夫
碓 井 昭 彦	菱 谷 勝 次 郎	長 谷 登	小 早 川 清	匿名 1名
岸 田 多 門	豊 田 紘 生	乾 賢 次	金 岡 幸 恵	
祐 野 尚 子	河 渕 清 子	井 狩 彌 介	西 野 勇 人	